



## 図書館サポーターが聞く!

### 第1回 春木先生

図書館サポーターの4年生2名が、春木先生にインタビューをしました。

本についてはもちろんのこと、学生時代のこと、現在のご専門分野を選んだ理由、

子育てのこと等など、お仕事からプライベートのことまで、様々なお話をお聞きました。

学生時代にしておくべきこととは? 春木先生流読書術とは? 英和生におススメしたいこととは?

人生の先輩である春木先生からの、心強いメッセージをぜひ受け取って頂けたらと思います。

#### ◎春木先生 ●図書館サポーター

●国際コミュニケーション専攻4年峯尾と申します。

●人間科学部人間科学科臨床心理社会心理専攻4年  
佐々木と申します。本日はよろしくお願いします。

●今振り返ってどんな学生時代でしたか?

◎学生時代は、ひたすら映画を見ていました。アメリカの古い映画から始めて、ドイツ、イタリア、東欧や旧ソ連の映画などを、片っ端から見ました。一日に3本見ることもよくありました。活字中毒で、本はもちろん新聞、雑誌も手当たり次第、読みあさりました。今でも覚えているのは、成人式を迎える前後に、ある人物の一生を描いたものを集中的に読んだことです。当時は、回想記、自叙伝、評伝が特に好きでした。人生まさに山あり谷あり、楽あり苦ありで、どんな人物でも、何もかもうまくいくような時期もあれば、壁にぶち当たったり、どん底に突き落とされたりする不遇の時期もあるということがよくわかりました。とりわけ、もうだめだということから這い上がり、新たな道を切り開いたという話は、20歳の私に生きる勇気を与えてくれたと思います。不遇な時も腐らず努力し続けて、乗り越えたという個々の経験談は、若い私にとってはこれからの人生をがんばって生きていこうという励みになったからです。

そして何よりも人生の目標を実現するには、情熱が必

要なのだ学びました。これは、シュリーマンの『古代への情熱』<sup>1</sup>を読んだときに強く感じたことです。

今でも、ある人物の生涯あるいは半生を綴った本はよく目を通しています。最近出ている本でしたら、オバマの『マイ・ドリーム』<sup>2</sup>、ライス元国務長官の『プライドと情熱』<sup>3</sup>などは、学生のみなさんにとっても読みやすいのではないのでしょうか。アメリカの社会の変化と多様性がこうした本から垣間見えますし、ニュースの人物をより身近に感じる事ができると思います。

余談ですが、今はもう、20歳の時のようにある人物の成長の軌跡に心躍ることはあまりなく、前述の本ですと、アメリカ社会の中で、オバマやライスまたはミシェル・オバマの両親が彼/彼女をどう育ててきたのか、という点に目が向くようになりました。年齢を重ねて母親になった今、他の親はどういう風に子どもを育ててきたのか、親の生き様が子どもにどのような影響を及ぼしているかといったところに、関心が変わってきたのです。同じ本でも、年齢によって読み方が変わってくるのが、読書の面白さであり、素晴らしさです。

話を元に戻すと、私の専門である社会学では、ライフストーリーは重要な研究分野です。あまり記録に残されることのないマイノリティの人々の声、あるいは歴史の中で埋もれがちな女性の声を丹念に拾い集めて再現したものというのは、決して名前の知られた人ではなくとも、ある個

人の人生を通して、その時代の特徴が浮かび上がってきます。彼／彼女が、生きた／生きているのはどういう時代なのか、その時、彼／彼女は、どんなことを考え、なぜそのように考えたのか、その時代の文化や規範意識、社会構造などが、個人の人生を通して、ずっと立体的に見えてくる瞬間があります。20歳の時は、人生何が起きるかわからないという期待感もあったので、とにかくこうした本をよく読みました。そして、私はどんな時代を生きているのか、どのような生き方をしたいのか、と自問自答しました。

大学時代に読んだ本の中で、一番心に残っている本は、ニム・ウェールズが書いた『アリランの歌—ある朝鮮人革命家の生涯』<sup>4</sup>で、朝鮮が日本に植民地支配されていた時代に独立運動をしていたキム・サンという人物の生き様を書いたものです。文中のキム・サンの言葉には忘れがたいものがたくさんありました。例えば、“自分にはあげられるものは何もないが、それでも私の人生は満ち足りた暮らしをしている者より豊かではないか。物質的な快樂はなくとも心は豪華だ”という言葉が、今でも心に残っています。20代の頃に読んだだけに、人間はこうあるべきということ強く感じました。合わせて読んだイザベラ・バードの『朝鮮紀行』<sup>5</sup>も、印象深いものがあり、自分もいつかこういうものを書いてみたいと思った記憶があります。

#### ●なぜ韓国に留学したのですか。

◎よく聞かれる質問です。紆余曲折があり、最初は旧西ドイツに留学に行きました。ドイツ人とユダヤ人がどのように向き合っているのか、ということをもっと知りたかったのです。ドイツ人とユダヤ人は、友達になり得るのか、恋愛なんてあり得るのかということを知りたかった。日本人として生まれた私が、韓国や北朝鮮の人、中国の人と向き合う時にすごく葛藤があったので、何かそのヒントというか、気持ちを整理するうえで得るものがあるのではないかと考えたのです。また、ドイツであれば、日本人は過去になんてひどいことをしたのかといった過去の歴史を追求されずにすみ、気が楽なのではないかとも思いました。

留学した旧西ドイツのケルンにある語学学校には、欧米はもちろん、東欧や、南米、アフリカなど、世界中から留学生が来ていました。香港や韓国から来た学生もいたのですが、何となく避けていました。日本人の私のことは

嫌いだろな、何か言われるかな、と恐れていたのです。

ところがある日、電車が遅れて遅刻をしたことから、韓国人男性と隣り合わせに座ることになりました。その日は、たまたまドイツ語学校の校長先生が私たちの教室に来て、各自、自己紹介をさせました。それで、私は「日本から来た。」、隣の韓国人男性は「韓国から来た。」と言ったところ、そのドイツ人の校長先生は目を丸くして、「君たち敵同士じゃないか。何で隣に座っているの。」と言ったのです。

ドイツ人の認識はこんな程度なのかと唖然としました。それまで私の知っているドイツ人は、「この本は良い本だから読んでみて。」と『アンネの日記』<sup>6</sup>を勧めてくる人たちでした。それにも驚きましたが、世界中から留学生を受け入れている学校の校長が、「君たち敵同士じゃないか。」とことなげに口にすることに、ショックを受けました。

ただ、そう言われた時、隣に座っていたその韓国人男性はずっと立ち上がり、「何を言っているのですか。」と猛然と反論を始めたのです。「確かに彼女は日本人で、僕は韓国人ですが、それで敵同士ってどういう意味ですか。」と。

すると校長先生はまた、「僕の日本人の友だちは、みんな韓国人のことを嫌っているから。」と言いました。それに対して彼は、「彼女は僕の友達、僕たち友達になります。なれます。なるんです。」と毅然として言いました。それを聞いて、私は胸が震えました。

彼は私を受け入れてくれるのだと思った瞬間、韓国人の彼との距離がぐっと縮まったのです。実際に話してみると、彼は「僕、今ね。平仮名を勉強しているんだよ。」日本のマンガが大好きなんだ。」と、満面の笑顔で楽しそうに私と話すようになり、日本人だから敬遠されるであろうと心に蓋をして殻をかぶり、ステレオタイプの考え方をしていた自分の過ちに気づきました。

こうして韓国人の彼や香港からきた女性とも親しくなると、もう話が尽きませんでした。自分でも不思議な程、話したいことが次から次へと湧いてきました。また、彼らは日本についての関心が高く、共通の話題がたくさんありました。でも、同じクラスメートでもブラジルの子とは話が続きません。向こうも日本のことを知らないし、私も知らない。その時21歳だったのですが、21歳の私の知識の引き出しが少なく、いくら言葉ができるようになっても会話が続きません。異文化コミュニケーションの場では、自分がきち

んとした知識や相手に対する関心を持っていないと、相手との会話は決して続かないし、発展もしていかない、面白いものにもならないと実感しました。そう感じたとき、私の側にいる韓国の子、香港の子とは、いくらでも話したいことがある、聞きたいことがある、ということに気づき、私の心の中で何かが変わりはじめました。

そして、ある朝、目が覚めた瞬間、思い立ったのです。「そうだドイツじゃないんだ、アジアなんだ。」と。それまでいろいろな人の自叙伝や評伝を読んでいたの、「これが私の人生の転機だ。」と私の頭の中で、鐘がカンカンカ〜と鳴ったのです。

日本に帰国後、両親に韓国留学について相談したところ、予想通り大賛成してくれました。我が家は両親とも教員だったので、歴史の本、特に戦争関係の本が家にたくさんありました。日本の近現代史の知識が同世代の子よりはあったために、逆に頭でっかちになっていましたが、両親が「東アジアに目を向けるのはいいことだ。」と背中を押してくれ、卒業後に韓国に留学し、そのまま大学院に進学しました。

なぜ中国でなかったのかと聞かれますが、ドイツでの韓国人との出会いが強烈だったこと、韓国に対する関心が日本ではまだまだ低く、よく知られていなかったこと、そして当時はまだ韓国に対して偏見や差別意識を持つ人が多かったので、逆に韓国に行きたくなったのです。周りからはずいぶん変人扱いされましたが、もともと人と違うことをするのが好きだったので、何か言われてもあまり気になりませんでした。

韓国語に不自由がなくなり実感したのは、韓国語でも読める、日本語でも読めるとなると、語彙が二倍になるということでした。話す言葉も二倍になり、表現の幅が広がることで、自分の心が豊かになる気がしました。

日本は、さまざまな国の文学が翻訳されている翻訳大国なので、日本語でも読めるものがたくさんあります。そういう意味では日本語が母語の私たちはとても恵まれています。韓国に行くと、日本語を勉強している人がたくさんいました。仕事に必要だったという理由もありますが、例えばロシア文学は韓国語に翻訳されているものは少ない。でも日本語が分かると、ありとあらゆる国の書籍が読めるということで、日本語を懸命に勉強していたのです。ポーランド文学や中南米の文学など、韓国では翻訳者が

いないが、日本にはいる。日本は翻訳者の層が非常に厚いので、日本語を学べば世界中の文学や情報に触れることができる、日本語を学ぶ人がたくさんいました。90年代の韓国の話です。



●実際に韓国へ行く前と行ったあとで、印象は変わりましたか？

◎どうでしょう。留学前の韓国に対する印象は、あまり記憶にありません。自分は韓国についてあまり知らない、知りたいという気持ちでいっぱいでしたから。現代韓国について書かれた本は、当時はあまり多くはありませんでした。韓国語の学習参考書もほとんどなかった時代です。とにかく情報がなかったので、生身の韓国人とどう接したらいいのか分からない、日本人として生まれた自分は、彼ら／彼女らとどう接していけばいいのだろうか、と悩んでいました。でも、それが一人の韓国人との出会いによって、変わりました。

ドイツから帰国後、日本語で読める韓国関連の本があまりないなら、韓国語で読もうと思い、韓国語の勉強に精を出しました。ある国に、一人でも親しい友人ができる、その友人の属する文化や社会のことがとにかく知りたくなりますよね。書物を通じて、自分では経験できないこと、現実社会のさまざまな側面を知ることができますが、異なる文化、社会の人と実際に繋がることによって、今私の目の前にいる人の話が聞きたい、知りたいという気持ちに突き動かされるようになります。彼ら／彼女と対話を重ねていくことにより、自分とは違うから、と閉ざしていた心の扉が開き、知的好奇心が湧いてきます。

留学をすると、周りはエリート学生が多く、学外でも社会的に成功している人や、それなりの地位がある人とは

かり接しがちですが、私の場合は、韓国で一人暮らしをしていて、あまり豊かではない地域に住んでいたため、社会的には下層の人とも日常的に接しており、社会的格差といった問題について、身をもって知る事ができました。東京しか知らない私の想像を絶する暮らしをしている人々が、韓国にはたくさんいました。当時はまだ日本人が珍しかったこともあって、どこに行っても興味を持たれ、親切にしてもらいました。韓国の人はとても情が深いので、忘れられない思い出はたくさんあります。

今でも韓国に行くと、とにかくいろいろな人に話しかけて、対話を楽しみます。私にとっては、どんな韓国人と話しても面白く、新たな発見があるのです。それが異文化の醍醐味です。同世代の韓国人でも、私とは成長過程が違うので、小学校時代の話聞いても面白い。年配のおばあさんの話を聞いても、歴史体験がリアルに伝わってきて面白いのです。それは私がこの20年間、最も関心があることが韓国であり、もっともっと知りたい、という強い気持ちがあるからでしょう。だから韓国研究者になりました。この情熱は、生涯消えないと思います。ちなみに、私は、ある国またはある国の人が好きとか嫌いという言い方は、決してしません。多様性があるので、ひとくくりにはできないからです。ですから、私にとって韓国、韓国人は、ものすごく魅力的だという言い方をしています。

自分が韓国に留学した当時、韓国の同年代の学生たちがよく言っていたのが、「いいなあ、日本に生まれて。私も先進国に生まれたかった。」という言葉でした。また、ある韓国人は「自分は植民地にされた国の男だから、日本人には対等に見てもらえないのだ。」と言いました。どちらの言葉も私の胸に重く響きました。日本人と韓国人とでは、歴史的経験が違うので、互いの心の奥底に流れる感情を深く理解することは難しいと思います。ただ、その気持ちに寄り添うことはできますよね。そのためには、実際に対話をする、本を読む、映画を見るといったことが、他者への共感や感情移入の手助けになると思います。

異文化コミュニケーションは、的確かつわかりやすく自分の考えを他者に伝え、理解してもらうこと、そしてどれだけ相手の立場に立ってものを考えられるか、相手の気持ちに寄り添えるかが重要だと思います。ただ、我々が実際に接することができる人は限られていますので、そういう時に本を読むと、様々な立場の人の気持ちがわかる、

なぜそのように考え、行動しているのかという時代背景がわかる、社会構造がわかる。そういう意味でやっぱり読書は、人が生きていく上では欠かせないものだと思います。自分ひとりで経験できることは限りがあります。みんながみな留学できるわけではないし、都会で生まれ育つわけではないですし、生まれた時代も違いますから。

すばらしい専門書はたくさんあるので、ここでいろいろお薦めしたいのですが、まず、専門書はある程度、基本的なことがわかった上で、さらに深く知りたくなった時に読むのがいいと思いますので、次の機会にたっぷりすることとして、学生の皆さんに、関心を広げるとっかかりとして読んでほしいと思うのは、マイノリティの人が書いた文学作品です。留学すると何が良いかというと、その社会でマイノリティになることです。自分になってみてはじめて、マイノリティの人の気持ちがよくわかります。自分が当たり前と考えていたことが、マイノリティの立場から見るとまた違うものとして見えてきます。

今回ご紹介する本の著者たちは皆、異文化の中で暮らすマイノリティの人たちです。『通訳/インタープリター』<sup>7</sup>は、移民2世のコリアンアメリカンの女性が書いた本です。『千年の祈り』<sup>8</sup>は、アメリカに移民した北京生まれ中国人女性が書いた作品です。完成度の高い短編集で、表題の作品はやはり映画化されています。『その名にちなんで』<sup>9</sup>『停電の夜に』<sup>10</sup>の著者、ラヒリはインド系の移民二世の女性です。私の大好きな作家です。この間、アメリカに行ったときに、フランス文学を研究しているアメリカ人女性とこの作家の話で盛り上がったのですが、私が同じように感じたものを彼女も共有していることが、とても嬉しかった覚えがあります。



『ペルセポリス』<sup>11</sup> はフランス在住のイラン人女性が描いた漫画です。漫画ではありますが、映画化され世界的ベストセラーになった作品です。イランに生まれた著者は、自由を求めて、オーストリアに渡り、現在はフランスで活躍しています。イランはどういう国かと聞かれても、すぐに説明ができないと思いますが、漫画だと若いみなさんにも読みやすく、なぜイランの人々が外国への脱出を試みるのかがよくわかると思います。日本にもたくさんイランの人々が暮らしています。また、ベールをかぶっている女性たちの胸の内もよくわかります。優れた作品です。

『白い紙／サラム』<sup>12</sup> は、日本在住のイラン人女性が日本語で小説を書き、文学界新人賞を受賞した作品です。みなさんがよく知らないイランと日本の一面が見えてくると思います。有吉佐和子の『非色』<sup>13</sup> は、日本の米軍基地の黒人兵と結婚してアメリカに移住した日本人女性の話です。これを読むとアメリカの中の黒人社会の実相やユダヤ人の立ち位置など、エスニシティによるヒエラルキーなどがよくわかります。

どの本も、皆さんの日常とはかけ離れた世界を見せてくれるでしょう。マイノリティの人の視線を、私はとても重要だと思っています。もしこれを読んでいるみなさんが日本人なら、日本にいる限りはマジョリティ＝多数派ですよ。多数派＝マジョリティの私たちには見えないものを、マイノリティの人達は描きます。それによって複眼的に物事が見られるようになります。

日本には「在日文学」と呼ばれるジャンルがあり、在日コリアンの作家が描いた作品にも優れたものがたくさんあります。なかでも、李良枝の『由熙(ユヒ)』<sup>14</sup>、金城一紀の『GO』<sup>15</sup>などは、是非皆さんに読んでほしい作品です。

こちらは、「日本人って誰のこと？」と考えさせられる本です。『単一民族神話の起源：「日本人」の自画像の系譜』<sup>16</sup>、『「日本人」の境界：沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』<sup>17</sup>の2冊です。彼は、他にも面白い本をいろいろ書いていますが、どの本もかなりボリュームがあるので、学生で時間がたくさんある今この時期に一読されることをお勧めします。

あとは、最近私が出した本です。『韓国の少子高齢化と格差社会：日韓比較の視座から』<sup>18</sup>。この中で、私は少子化政策および移民政策の日韓比較をしています。日韓は少子高齢化の進行という同じ現象が

みられますが、政府の打ち出す政策には、かなりの違いがみられます。これはなぜか、ということ进行分析しています。また、近年の韓国社会は、外国人人口が増加しており、国際結婚も急増しています。韓国は単一民族国家を標榜していましたが、もはや実態は違う。日本でも韓国でも外国人移住者が増加する中でさまざまな問題が起きていますが、そうした問題に政府はどう対処しているのか。同様の課題を抱えている日韓両国の政策がどう変化していくのかということに、今関心を持っています。

●研究者としての未来しか考えられなかったのですか？

◎子どもの頃から、どんな分野でもいい、何かスペシャリストになりたいという強い気持ちを持っていました。そして見つけたのが「韓国」です。本当に自分の好きなことをしている時は、ご飯を食べる時間も惜しいし、寝る時間も惜しいですね。自分が夢中になって取り組める、すべてのエネルギーを捧げたいこと、つまり私にとってはそれが韓国研究でした。自分の好きなことが、運よく仕事になっているという点で、とても恵まれていると思います。

ただ、実際に研究者としてやっていけるようになるまでは、たいへんでした。留学期間も長かったですし、出産・子育てもあり、順調に研究者の道のりを歩んできたとはとても言えないのですが、それでも今こうして英和で教えることができ、幸せです。

●子育てと仕事の両立のなかで心がけていることはありますか？

◎これが今、私の生活の中で一番の課題です。仕事をして、研究もして、子どもも育てる、この3つを同時進行でうまくやっていくのは、至難の技です。バランス良くなるとてもできません。時間を上手に使うことが必要なのですが、まだまだ未熟で、どうもうまいきません。

子育ては決して1人ではできませんし、ましてや母親だけの責任ではありませんが、どうしても女性の方が子育てに多くの時間を割き、かつ身体的にまたは精神的に苦しいときも我慢をしまいがちです。この点は、これから働きながら子どもを育てることになる皆さんも、いろいろ悩みながら、バランスの取り方を模索していくことと思



ます。子どもは自分のすべてを捧げたいほど愛しい存在ですし、子育てを通じて得るものもたくさんあります。それでも、一日は誰にとっても24時間しかないので、バランスは必要です。

本の話と関連づけると、母親が本を読む姿を子どもに見せることは、とても大切なことだと思います。仕事に打ち込んでいる、本を読んで勉強している母親の姿を見ながら子どもが育つということは、とても良いことではないかと思えます。母親になっても、何かをあきらめる必要は決してありません。むしろ自分の世界を持っていないと、子育ての重圧感に押しつぶされてしまいます。

私が子育てで心がけているのは、韓国・中国をはじめ、外国に対する偏見を持たせないということです。子どもは幼いときは家庭の、成長すると同世代の影響を強く受けるようになります。なので、家庭内では、外国人に対する誤ったイメージや偏見を持たせないように心がけ、自然な形で異文化に触れさせるようにしています。海外にも同行し、黒人の歴史や移民の話もします。外国の文化を誤って表現している絵本は少なくないので、絵本はかなり選んで与えました。また、ニュースを見ながらこの報道はおかしいと、批判したりします。自分の専門なので、韓国・北朝鮮について知ることがいかに大切かという話をよくします。そのせいで、子どもは小さい時から、テレビで「北朝鮮」という言葉が流れるとすぐ反応する子になってしまいました(笑)。これは親のエゴかもしれません。

また、うちは男の子なので、男の子同士で、「女ってさあ…」とよく言うようになります。女の子だから、男の子だからと区別する感覚を持ってほしくないで、男の子だからできないことはない、女の子だからできないことはない、と言い聞かせたりしています。

●お子様には、幅広く本を読ませましたか？ それとも、何か意識して、こういう本を読ませたというものはありますか？

◎働いていると、どうしても子どもと接する時間は少なくなってしまうので、生後1ヵ月くらいの時から、本の読み聞かせだけは、よくしました。必ず抱っこして私の膝の上に座らせ、子どもの頭の上からささやきました。理解しているかどうか分からなくても、母親として、とにかく読み聞かせ

だけはしてあげたいと思い、おやすみ前の日課にしていました。

ある程度言葉が理解できるようになると、まずは自分が好きだった思い出の本が、子どもにも思い出の本になってくれたらいいなと思い、『いやいやえん』<sup>19</sup>『ロボット・カミィ』<sup>20</sup>『ももいろのきりん』<sup>21</sup>などをよく読んであげました。『いやいやえん』に、積み木の船をみんなでつくり、鯨捕りに行くという話があるのですが、子どもの想像力のすばらしさに感動します。『ロボット・カミィ』も工作で作ったロボットが生き生きと動き出しますし、『ももいろのきりん』も桃色の模造紙で作ったキリンが走りだし、子どもを魔法のクレヨンの木に連れていってくれます。

他にも、『かわいそうなぞう』<sup>22</sup>、『ちいちゃんのかげおくり』<sup>23</sup>、『茶色の朝』<sup>24</sup>、『エリカ奇跡のいのち』<sup>25</sup>といった、戦争やファシズムの恐ろしさを伝える絵本を意識して読みかかせました。『かわいそうなぞう』は今まで何度も読んであげましたが、どうしても涙声になり、いつも途中で読めなくなってしまう。子どもは「泣くならやめれば。」と言ったりしますが(笑)、「ママは何で泣いているのだろう？」と子どもに考えてもらいたいと思いました。

また、『せかいいちうつくしいぼくのむら』<sup>26</sup>という本があるのですが、子どものみならずみなさんにも是非、手にしてほしい絵本です。舞台は、美しいアフガニスタンの小さい村なのですが、その村は爆撃され、戦火で荒廃します。子どもの目線から美しかった村の様子が淡々と描かれているのですが、絵本なので、目からも耳からも心に響きます。子どもも食い入るように見入っていました。自分は平和な時代に生まれているけれど、平和な時代というのは自分たちが努力をしないと変わるか分からない。生まれる時代は選べないけれども、この時代に生まれたことの意味を考えてね、と、こういった本を読みながら子どもに話しています。

この絵本作家は小林豊さんと言いますが、彼の絵本はどれも胸を打ちます。アフガニスタンの話が、自分たちとは遠い地域の話ではなく、身近なものに感じられるようになります。絵本は子どものものと考えがちですが、忙しい日常のなかで、メッセージ性の高い絵本を手にとると、はっとさせられることが多々あります。

●英和生にアドバイス、こうであって欲しい、こうすると

っと学生生活が楽しくなるよということがあったら教えてください。

◎まず、英和は駅から距離がありますね。なので、電車の中やバスの待ち時間に意外と本が読めると思います。本を良き友にしておくと、友達がないキャンパスでも淋しくないですよ。私は一人で食事する時は、必ず何か読みながら食べます。皆さんにはあまりお勧めできませんが(笑)。

どうい本に巡り合うかは個人差がありますが、みなさんそれぞれ好きな分野があると思います。日本の作家でもいいし、今回紹介したような、普段はあまり目が向かなかったジャンルのものをちょっと読んでみるのもいいものです。それは映画であっていいかもしれません。皆さんも忙しいと思うので、隙間時間をうまく使って、多読してほしいと思います。読書は習慣づけないと、億劫になってきてしまいますから。

通勤通学の往復時間だけでも、結構、本は読めます。私は通勤の往復でだいたい1冊は読み終えるので、ざっと月に30冊は本を読んでいると思います。買わなくても、図書館にリクエストをすると、ものによってはすぐ届きますし、予約をしておけば「用意できました」とメールで連絡がくるので、便利です。面白そうな本を見つけたら、私は近所の図書館で予約して、読んでみて気に入ったらすぐに購入して、大切に本棚に並べています。

あとは、よくやるのは、半年とか一年タームで「テーマ読書」をすることです。今年はこのテーマで勉強してみよう決めるのです。例えば、今期のテーマは中国にしよう！と決めたら、中国関連の本を集中的に読みます。そうすると短期間ですごく知識がつかますよ。お金をかけなくても、図書館で「中国社会」と検索すれば、関連本がたくさん出てきますから、あとは予約して到着を待つだけです。これを続けていくと、かなり力がついて、これが20代後半、30代で、ものすごく生きてくると思います。

あともうひとつ、学生の時は割と自由な時間がありますから、「これだ!」という自分のテーマというか世界を見つけたいと思います。何か行き詰った時でも自分の世界があると、うまく気分を切り替えることができます。特に社会人になると生活が単調になるので。

例えば私の場合は、日々の生活で、韓国に救われてい

る部分があります。毎朝、韓国の新聞を見ながら、韓国では今こういうことが起きているのか、何でこういうことになるのかな、と考えたり、韓国へ行って私と異なる価値観で生きている人たちと話して、なるほど、そういう考え方もあるのかと感じたり、そういうことがよい気分転換になっています。これは、趣味の世界でも良いと思います。私は趣味がないので(笑)、ひたすら韓国です。

自分の世界があった方が楽になれる、何か自分の好きな世界がたくさんあると、そこに浸ると気持ちが切り替えられるし、精神的にもバランスがとれると思います。学生時代なら、平日にいろいろなところに出かけることができますし、本も読める、映画も見られる。自分が行動に移しさえすればいろいろな機会はあるので、何か自分の夢になれるものを1つでも多く見つけてほしいと思います。

●本日はありがとうございました。



【今回ご紹介頂いた本】

☺マークが付いている本は図書館に所蔵があります。(※所蔵状況は2012年4月現在のものです。)

- 1『古代への情熱：シュリーマン自伝 改訳』 / シュリーマン著；村田數之亮訳, 岩波書店, 1976 ☺
- 2『マイ・ドリーム：バラク・オバマ自伝』 / バラク・オバマ著；白倉三紀子, 木内裕也訳, ダイヤモンド社, 2007 ☺
- 3『プライドと情熱：ライス国務長官物語』 / アンTONIA・フェリックス著；渡邊玲子訳, 角川学芸出版, 2007
- 4『アリランの歌: ある朝鮮人革命家の生涯』 / ニム・ウェールズ, キム・サン著；松平いを子訳, 岩波書店, 1987
- 5『朝鮮紀行：英国婦人の見た李朝末期』 / イザベラ・L・バード著；時岡敬子訳, 講談社, 1998
- 6『アンネの日記：完全版』 / アンネ・フランク著；深町真理子訳, 文藝春秋, 1994 ☺
- 7『通訳/インタープリター』 / スキ・キム著；國重純二訳, 集英社, 2007 ☺
- 8『千年の祈り』 / イーユン・リー著；篠森ゆりこ訳, 新潮社, 2007 ☺
- 9-1『その名にちなんで』 / ジュンパ・ラヒリ著；小川高義訳, 新潮社, 2004 ☺
- 9-2『その名にちなんで：特別編』 / ミーラー・ナール監督, 20世紀フォックスホームエンターテイメントジャパン (発売), c2008 ☺
- 10『停電の夜に』 / ジュンパ・ラヒリ著；小川高義訳, 新潮社, 2000 ☺
- 11-1『イランの少女マルジ (ペルセポリス:1)』 / マルジャン・サトラピ著；園田恵子訳, バジリコ, 2005 ☺
- 11-2『マルジ、故郷に帰る (ペルセポリス:2)』 / マルジャン・サトラピ著；園田恵子訳, バジリコ, 2005 ☺
- 12『白い紙/サラム』 / シリン・ネザマフィ著, 文藝春秋, 2009 ☺
- 13『非色』 / 有吉佐和子著, 中央公論社, 1973 ☺

- 14『由熙(ユヒ)』 / 李良枝著, 講談社, 1989  
(※図書館所蔵『李良枝全集』に収録されています)
- 15『GO』 / 金城一紀著, 講談社, 2000 ☺
- 16『単一民族神話の起源：「日本人」の自画像の系譜』 / 小熊英二著, 新曜社, 1995 ☺
- 17『「日本人」の境界：沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』 / 小熊英二著, 新曜社, 1998 ☺
- 18『韓国の少子高齢化と格差社会：日韓比較の視座から』 / 春木育美, 薛東勲編著, 慶應義塾大学出版会, 2011 ☺
- 19『いやいやえん』 / 中川李枝子さく；大村百合子え, 福音館書店, 1962 ☺
- 20『ロボット・カミイ』 / 古田足日作；堀内誠一絵, 福音館書店, 1970
- 21『ももいろのきりん』 / 中川李枝子さく；中川宗弥え, 福音館書店, 1965 ☺
- 22『かわいそうなぞう』 / 土家由岐雄作, 金の星社, 1977
- 23『ちいちゃんのかげおくり』 / あまんきみこ [ほか著], 日本図書センター, 1995 ☺
- 24『茶色の朝』 / フランク・パヴロフ物語；ヴァインセント・ギャロ絵；藤本一勇訳, 大月書店, 2003
- 25『エリカ奇跡のいのち』 / ルース・バンダー・ジー文；ロベルト・インノチェンティ絵；柳田邦男訳, 講談社, 2004
- 26『せかいいちうつくしいぼくの村』 / 小林豊作・絵, ポプラ社, 1995 ☺